

受十善戒作法諺解

受十善戒作法諺詮卷上



苾芻雲照



善ハ人たるの道即人道の根源にして法性自爾の戒
 法なれば道の内外人の緇素を問はず凡そ人たる者の
 常に踐行すへきの道なりされハ此戒ハ未だ受けざる
 も謬て犯す者ハ惡果を結シ能く持つ者ハ福報を致せ
 へし何ぞ殊更ニ受得するお及はんと疑ふ者あらん是
 れ戒善妙善の功德の差別あるを知らざるなり所謂妙
 善といハ上に云か如く未だ戒を受ざる者も十善を作せ
 ハ必ず好果を招く者なれハ是ぞ妙善と云ふ所謂戒善

1095412

二
とい。一日一夜或ハ盡形壽を期して諸佛菩薩及ヒ現前
和上の前に於て必ず此戒を持ちて犯すヘからすと誓
言して受得する時上の妙善の外に別ニ我身中ニ防非
止惡の機能を成就して念念刻刻に其功力を倍増して
轉禍爲福轉迷開悟の功德增長して止まざると燃火に
薪を添ヘ草木の一旦芽種を發生すれハ必ず莖葉花果
日夜ニ增長するカ如き別法を發得する是を戒善と云
況や又我等凡夫ハ無始の慣習として惡事とい知らす
知らす熹んて是を行し善事をハ勵むとすれど猶怠り
易き習なれハ必ず日日晨朝又ハ三時ニ誓願して此十

善戒を受け持ちて怠るヘからざるなり

先懺悔文

我昔所造諸惡業

皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生

一切我今皆懺悔

懺悔とい懺とい梵語にして具ハ懺摩と云漢に譯
して客恕と云是れ人に對して若し無禮を作し去時
宥恕し給ヘと謝するの義なり悔とい過々悔る義な
り今此文ハ華嚴經の普賢行願品ニ出たり是れ大乘
懺悔の文なり依て本尊並ニ十方三世の諸佛菩薩無

量無邊の一切三寶に對し奉りて。我か無始の罪障を悔て謝し奉り。自今後更に敢て再ひ犯さしと。忍恕を乞ふ義なり。此至心懺悔の功力に依て。輕き罪ハ。忽其力を滅し。重き罪ハ。漸漸に輕くあるなり。業報差別經の偈に。苦人造重罪。作已深。自責懺悔。更不造。能拔根本業。と説けり。拔といハ。樹木の根を抜く時ハ。其生長の力用を失ふか如きを云なり。受者心と致して。毎日三時。又ハ朝昏ハ。此懺悔の文を誦して。滅罪を祈るへきなり。今華嚴經の意に依て。大乘の意を明さハ。今此世界ハ。我等か無始の煩惱と惡業とに由て。穢らはしき世

界と見れども。諸佛菩薩の眞實の知見の前ハ。此世界ハ。本來清淨。瑠璃の世界なり。故に今我身口意の三業を淨めて。普く十方一切如來の前に對して。拜禮し懺悔し奉る。我此一身より。無量剎塵の身を現して。一一に徧く。無量無盡の佛を禮し。其一一の海會に對して。諸の勝妙の華鬘。燒香塗香。燈明。飲食。妓樂。幢幡等。妙高山の聚の如く。我諸の如來に供養し奉る。是れ皆我本具佛性の功德力と。普賢菩薩行願の加持力と。依て。此廣大の供養を成就し。能く一切の罪障を滅して。廣大の功德を成就するを得と。是の如く明了に。

觀會し畢て。而して後に。一心專會に。佛前に對し。長跪
し合掌して。我れ親たり。十方三世の。一切諸佛菩薩緣
覺聲聞。一切三寶の。海會に對し奉り。又三界諸天善神
に對し奉て。此十善戒法と。親しく受るの想を凝して。
此懺悔の文。及び三歸十善戒を。懇懃至心に唱ふへし。
我昔所造諸惡業と。我と。受者佛前に對して。自ら
稱する言なり。昔所造等と。昔より以來。今日に至る
まで。造り犯す所の。一切の罪惡。無量無邊なれども。是
を約めて言へ。下に明す所の。十惡業を出さるなり。
皆由無始貪瞋癡と。無始と云へ。我等衆生の。身心の

元初へ。忽然として母の胎内に。生したる者は非ず。必
す久遠の昔より。漸漸に作る所の。原因ありて來るな
り。所謂此貴賤と賢愚と。好醜と禍福と。皆前世宿生
の。善惡業の原因に依て。結果したると。猶今人の幼弱
の時。勉強したる者は。老後必ず幸福を得懶惰なる者
へ。必ず惡結果を得ると。同一般の理にして。唯現見と
不眼見との。不同あるのみなり。又前世と。一生二生
の前をのみ云は非ず。過去の過去際を尋ぬるに。尙其
過去ありて。計り知る可からず。故に無始と云は。是れ事
法の絶相と。混同すると勿れ。理の貪瞋癡と。其無始よ

り以來善惡因果の理を知らざるを以て己か心に任せて十惡を造り自心に稱ふ色聲香味觸法等の境界に頻りに之を貪り飽くを知らざるを貪と云又己か心に稱はざる物に對しては猥りに之を惡み厭ひ憤懣するを瞋と云是の如く猥りに怒り猥りに貪りに前後の辨へなきは是れもど善惡因果の理を知らざるの致す所なり故に是を癡と云なり癡とい愚蒙にして辨へなきとなり所謂理に背きて瞋怒貪欲すれハ禍を招き理に順して堪忍し慈善を行すれハ必ず福の來ると云とを知らず

此世の因果依て未來の結果を成するあり。

重の因。況や又現今我心に稱はさるとよ出會ふは是れ本已か前世亦ハ此世よ於て曾て惡事を作したるどありて其惡の報の來れるなりと知らは強ち怒るへきよ非す又現今幸福の到れるハ前生よ曾て作し善根の好報なりと知らは強ちに誇るへき理かしと是の如く心を因果の道理に安く時ハ物ハ對して心を動かすとなし

是れ亦現過相望。一重の因果あり

是を明智とす

此明智なきを無明と云又ハ癡と云諸煩惱生必由癡故と云て此愚癡か一切煩惱惡業の基礎となるなり癡とい暗昧不明の謂なり故よ皆由無始貪瞋癡と云

從身語意之所生。此一句の上の諸惡業。即十惡業と造るとの。皆身と口と意とに從りて造るとを明すなり。十惡といふ。身三口四意三とて。身は三の惡業あり。謂く一に殺生。二は偷盜。三は邪淫なり。口は四の惡業あり。謂く一は妄語。二は綺語。三は惡口。四は兩舌なり。意は三の惡業あり。謂く一は貪欲。二は瞋恚。三は邪見なり。一切我今皆懺悔といふ。以上此十惡業の。我身と口と意とより生ずる者なるを以て。深く此身口意の惡業を悔て思ふへし。如何を我れ哀哀たる父母に受たる。此身此口を以て。其鴻德に報はんといはせす。還て此身口

を以て。自他を損害し。十惡業を行して。父母の恩德に背き。罪愆ツミを作すとやと。深く悔て。必改の志を發すへし。况や又。此父母の胎中に入り。生育を受るといふ。亦偶然に非ず。其原因を推尋れん。本前世の十善業の力に由る者なれん。更は思惟すへし。如何う此前世の善心功德法に背き。此惡事を作すとやと。深く省み切に悔て。今日より後。更に敢て作さしと。誓心決定して。三寶の前は對して。恭しく合掌して。誓言するを。懺悔と云なり。皆といふ。遺餘なきあり

次三歸

弟子某甲 盡未來際 歸依佛 歸依法 歸依僧

三歸と云ふ。佛法僧の三寶に歸依と。我身心の依り所とするとなり

弟子某甲といふ。弟といふ諸佛菩薩に。先よ既に菩提心を

發し。此貪瞋癡慢の煩惱業を斷じて。無漏無漏といふ六根より漏れ

出る煩惱を斷盡し。清淨の妙果を得給へり。我の今發

心して。後よ妙果を得んと願ふ者なれ。世間の弟の

兄に隨ふか如く。又子の親に事ふるか如く。生生世世

永く誓て。三寶の御弟子となり。更よ私の意を。縦にせしと誓ふなり

某甲といふ。受者の自の名を稱ふるの代りなり。正しく我名を稱すへし

盡未來際といふ。今日より始めて。妙覺の佛の覺を聞く

に至るまで。其中間に於て。決して餘の惡友。及ひ邪魔

外道邪師邪教に。隨はし。永く誓て。三寶に歸依せんと

盟約するなり

歸依佛といふ。佛といふ。本梵語にして。具に佛陀と云。此

に譯して。覺者と云。所謂貪瞋癡慢等の。無量の煩惱の

雲霧を斷じ盡す時。心中明了なると。秋夜の晴れた

るに。仰て星月を見るに。明了よしして。隠れなきが如く。

又明鏡の。人畜山川の影を寫して。遺すとなく。謬ると
なきか如く。佛世尊の。過去無量歲より修行し給ひて。
菩提樹下に於て。廓然^{カクラン}として悟を。能く明了の智眼を
以て。三世の有情非情。及ひ善惡因果の道理。及ひ一切
事物の始末を。歴^{レキ}歴と照見し給ふ。故に覺者と云。又の
一切智者と云なり。又此覺知の境界の。上に云如く。一
切衆生。及ひ此世界國土の。皆本來の淨土なるを。覺
り給ふなり

歸依とい。梵語に。南無と云。又の歸命とも。救我とも
翻す。言意に。我れ身命を投して。佛に依頼し奉る。願く

の我を救ひ給へとい。言の意なり。歸とい。譬へは人の。他
國に往きたる者の。我家に歸りたる如く。我親の内へ
歸りたる如く。佛のを想ひて。身心共し。佛に歸向渴
慕して。佛の外に心を寄せさるとなり。依の字の意は。
人の衣服を著るの如く。暫くも衣服を離れては。人に
會せんとも。又作すと。及ひ立つと臥せとも。出來さる
如く。佛に依寄して。暫くも離れさるとなり。是を歸依
佛と云

歸依法とい。法の梵語にて。達磨^{タマ}と云。法とい。法則の
とめて。範とり手本とせるとなり。又軌持とせ。軌則の

として諸法の自性を任持せざるはなり。上の佛ハ何れ由
 て是の如く大悟し給ふそとなれハ。即此三世因果の
 眞理を明了し覺知し給ひ。此三世の一切諸法。一とし
 て。種種の因縁和合より生ぜざるハ無く。我此知能才
 覺も。伎倆顔貌も。此是れ四恩の鴻徳より組織し來れ
 る者なれハ。實ハ自己の自ら作せる力ハ非ると覺
 知する時ハ。此諸の因縁を離れてハ。其自己の實體あ
 るとなく。實ハ無自性無我なれハ。我れ自ら誇るハ
 理もなく。又怒るハきとも。惜むハきとも。無き者なり
 と。深く無我の眞理を覺悟して。無始已來の大邪見大

我慢及ひ貪瞋癡等と斷破し給ひて。此本來佛性の明
 徳を開發し給ひたれハ。此無我の眞理の法こそ。諸佛
 の師と仰ぎ給ふ所。又菩薩も是ハ依て。過去に發心し
 今日ハ修行し。未來に正覺を成し給ふなれ。されハ我
 も亦諸佛菩薩の如く。此因果無我の眞理に依て。一切
 の諸惡を離れ。十善を修行し。乃ハ佛果大悟の時ハ至
 るまで。永く此法と離れしと誓ふ。是れ理法あり 文字經卷ハ
 此法理を記載して。我悟を聞くハきの。法門なり。是れ教法
 修行の軌則ハ。我身口意の三業を攝して。惡を遮し
 善を勤めしむるの。法則なり。是れ行法あり 諸佛大涅槃の處

の。我所歸所入の果體是れ果あり。此教理行果の四法。皆我師にして。歸依すへき所なり。故に此依法と云。而して此を唱へて。生生世世。此法門に値遇頂戴せんことを誓ふなり。又此法理の。生佛不二にして。恰も帝釋殿の羅網ワウモの如くにして。本來萬德を具足成就して。自身即佛なり。能く此理を悟る者。即身此成佛して。萬德自在なり。是れ此本具佛性の理法の中。に佛法僧の三寶の功德。本來成就して。缺減あると無し。故に此理法。即眞如佛性。大般涅槃の體。一切三寶の本源なり。尤も歸依すへきの根本なり。

歸依僧との。僧の梵語なり。具に僧伽と云。譯して和合衆と云。此和合と云ふ。六種の義あり。所謂身口意戒見利の。六和敬なり。身和敬との。一切の佛弟子たる者の。頭と剃り衣を染め。三衣一鉢を受持して。行住坐臥。四威儀同一體よして。異様の衣を著し。異様の行儀を作さざるを云。口和敬との。佛語を遵奉して。和合語を作し。大衆に恭敬隨順して。相諍はさると云。意和敬との。乳水の別なきか如く。心相隨順して。隔異あきを云。戒和敬との。衆僧皆同。一佛戒を受持して。老少賢愚。凡聖の差別なきを云。見和敬との。一切の佛弟子の。皆二

百五十戒を受持して。此一の戒に於て。輕重取捨の異見なく。彼此同一見に住するを云。利和敬とハ。衣食住の利養を得る時。十方僧と共に。平等に受用して。財利を私に用ふるとなきを云。此六和敬の規則ハ。文殊彌勒。迦葉阿難等の諸大菩薩僧。及び諸大聲聞僧の通儀にして。佛世の聖僧より。末代の凡夫僧に至るまで。以て同一和合海の衆を成す。其威徳最大威力あると譬へは。大海水の同一和合の力。能く船を浮へ。物を生ずるか如く。又三軍和合の力。能く國を持ち。敵を禦くか如く。此六和敬の力も。能く煩惱等の魔軍を摧きて。

佛法を弘傳し。一切衆生の所依止の處となる。よ堪たり。若此僧寶なき時ハ。佛所説の教も。末代の今日に傳へると能はされハ。末代の佛弟子たらん者ハ。殊更に此僧寶よ。歸依すへきなり。

以上の佛法僧を。三寶と稱するとの。世間の財寶の能く人の命根を續き。安樂住せしむるか如く。今此三寶ハ。能く衆生の菩提心の種子を。生長養育して。惡趣の苦難を救ひ。人夫の善果福報を。出生し。出世解脫の資糧たる者なれ。是を三寶と云。故に大智度論に曰。世間の病人の。良醫と藥と看病人といふ。依らされハ。病平

愈するを得ざるか如く。一切衆生の煩惱の病を療
せんとならん。佛と法と僧との三寶を頼み奉るに非
されん。世間の災障を離れ。菩提を得ると能はざるを
り。佛ハ醫王の如く。法ハ藥の如く。僧ハ看病人の藥餌
を調へて。病人に飲まじむるが如くと説り

次三竟

弟子某甲 盡未來際 歸依佛竟 歸依法竟

歸依僧竟

既ハ三歸依法を成就し竟れん。今結略して。三寶及ひ
和上に付囑して。終身教誡を乞て。其權護を求むる也。

次正受十善戒

弟子某甲 盡未來際 或ハ百歩間。一食頃。半日頃。一日一
夜。七日間。一月間。一年間。盡形壽

不殺生 不偷盜 不邪淫 或ハ不
姦欲 不妄語

不綺語 不惡口 不兩舌 不慳貪

不瞋恚 不邪見

弟子某甲等の八字ハ上の釋の如し

百歩間一食頃半日頃といハ佛說未曾有因緣經に説く。

王 波斯匿王 曰世尊の說給ふか如きハ十善行法ハ心道の

三法 貪瞋見 護持すると得かたし。當に如何に受けて漏

失せさらしむへきやと。佛王に告て曰。世人心の鹿な

ると。譬へは猿猴の如し。諸の煩惱の風に動轉せらる。是故に十善道を行せんと欲は、遅久なるを得ず。十善を修せんと欲せし。當に三時を限るへし。晨より食時に至るを。名つけて上時とす。一食頃を経るを。名つけて中時とす。百歩と行く時を。名つけて下時とす。能く十善を受て。其堪る所に隨て。一時中あ於て。其心を將護し。三戒貪瞋邪見を堅持して。漏失せしむるとなし。是を則名つけて。十善を修行すとすと。王曰。世尊の説給ふか。如きハ。三時を限りて。十善行を持つとハ。其功蓋し微し。云何か福を生せんや。佛王に告て曰。人十善

を修する時節。促しと雖とも。功報彌廣し。何を以ての故に。心道の三戒守護し難きか。故に。少時持つと雖とも。果報無量なり。譬へハ人ありて。百年の中に於て。薪草を積集して。火を以て。之を焚かんに。須臾に滅盡するか如し。是故に。當に知るへし。少時善を修して。能く無量の悪業の重罪を滅す。又火を鑽るに。勤加して力を用ふれハ。須臾に山を得。火の功力。能く天下の草木叢林を傾け盡して。乃ち息む。大王當に知るへし。人十善を修するとも。亦復是の如し。須臾の功能く無量の悪業重罪を滅して。能く行者をして。菩提の芽を起さ

萌芽生ずるか故に、漸漸增長して、佛果を成ずるに至ると説給へり。凡そ一切の諸悪の、皆貪瞋癡を根本として、生起せざるのなし。故に假令一時間と雖も、能く此貪瞋癡を制伏して、起らざらしめ、實は其功德廣大なるへし。况や此一時間制伏の功德を本とし、漸漸に功を積み徳を累ぬる時、長く相續して、三戒を成就して、遂は十惡業をも、作さざるに至るへし。如來の善巧方便を以て、波斯匿王の爲に授け給ふ、誠に讚歎隨喜し、隨順奉行すへきなり。况や又其身下賤にして、屠兒獵者姪女等の類の餘の七戒をも、永く持

つと能はず。昔時迦旃延の教示に依て、姪女の晝分の戒を受持して、死して後、鬼道に生じられたれども、晝分の天堂の樂を受け、夜分の地獄の苦を感じ。又獵者の夜分の戒を受持して、死して後、夜分の天堂の樂を受け、晝分の則地獄の苦を感じせしと云とあり。誠に因果必然の理なるを信知して、力の堪ふるは、隨て十善戒を護持すへきなり。或は七日間一月間一年間等の、其人の意に任せて、受け持つへし、盡形壽と云ふ。此形體のあらは、限りを云。盡未來際といふ。上は釋するが如し。

不殺生といふ殺す人を殺すを重罪とし。畜生等を殺すを輕罪とす。此輕重の二戒を堅く持て犯せざるを止善の戒とす。又鳥獸魚鼈等の命を贖ひて放生と。或人の危難を救ふ類を作善と云なり。凡そ殺を行する者ハ生前ハ多病短命ハして。命終の時惡相現前シ。地獄に隨して。苦を受るを窮りなし。或ハ鐵山ハ身を碎き。劍林に肉を割き。火鳥骨を破り。熱蛇髓を啜ふ。泣けとも涙落ちす。猛火眼を焦す。叫へとも音出ず。鐵丸喉ハ滿つ。一日一夜。八万四千回の生死を感ず。万劫万生ハ恒河沙數の苦惱を受く。罪畢て人間ハ生るれハ。

多病短命にして。罪報尤も重し。之ハ反して。不殺戒を
持つ者ハ。世に處して。無病長壽の福を得て。將來解脱
の好果を得。故に佛。此戒を制し給ふ

不偷盜といふ。小銅錢四百文

今の四十
錢ハ當る

已上の貨物を盜

めハ。重罪なり。四百文に滿たさるハ。輕罪とす

已上有
部律ハ

依又佛法僧の三寶物を盜すれハ。其罪尤も重し。今時
破戒ハして。佛物を費す等ハ。其罪尤も恐るへし。凡そ
戒を受る者ハ。乃至一枝一草。一粒穀にても。皆取ると
を得ず。夫れ偷盜の罪ハ。現世ハ恒ハ牢獄ハ處し。或
ハ人ハ呵責鞭杖せられ。後世にハ必す地獄に入り。冰

山より身を碎き。火箭心ふ入る。鐵刺皮を剥き。劍葉骨を削る。死を求むれとも得ず。無量歳を経て。苦を受る。中間無く。或は餓鬼の中お生じて。鐵丸と噉て。飢と休む。饒湯を飲て。命を續く。百千却を経れとも。水穀の聲をも聞かす。適出て人間お生すれは。裸形よして。黒く瘦せ。口氣常に臭し。十善戒經の說あり之に反して。不偷盜戒を持つ者は。現當二世。富財多福の報を得。故に佛。此戒を制し給ふ。

不邪淫との。此戒に。在家出家の別あり。在家は。自妻に交るに。節を以てし。操を破るお至らざるを。正淫とす。

自餘の放蕩を。邪淫と云。出家へ一切女人。童男童女。乃至傍生等ボクシヤクを犯すれは。皆重罪とす。故に佛之を制し給ふ。二根合すれは。娼樂を受くと受けざるを論せし。根本重罪とす。ホカトニコ餘支を犯すは。皆輕罪なり。夫れ索無くして。心と縛し。生死の獄に繋さ。刀に非きして。人を害して。出離の道と障ふると。娼欲に過ぎたるは無し。故に智度論より。日劍を執て。敵に向ふ。是れ猶勝つへし。女賊の人を害する。是れ禁すへからし。毒蛇毒を含む。猶手を以て把るへし。女情人を感はす。是れ觸るへからし。又佛爲娑伽羅龍王所說經より。日若邪淫の者は。地

獄蓄生餓鬼ニ隨すへト。後に人間ニ生るれハ餘業を
 以ての故に。二種の報を得。一ハ愚癡。二ハ妻貞良
 ならずト。受十戒善經に曰。嬌ニに十の過患あり。一ハ
 貪嬌の者ハ天上ニ生シ天帝釋トありて。五欲の樂を
 受クと雖トモ心食を偷む狗の如シ。常に醉て醒す。五
 欲の河の中ニ没す。二ハ貪嬌の人ハ人王トなりて。威
 力自在ナリと雖トモ恩愛の奴ト作て。野人ト使はれ
 多く財寶を得れトモ。火の薪を受て。厭足せさるか如
 身ヲ亡シ國を喪シ。死シて惡道ニ隨ス。三ハ貪嬌の
 人ハ常ニ六賊ニ繫屬シて。驅策せらる。無常乃大象。其

背上を躡む。心ハ猿猴の如シ。衆難ヲ知らず。欲火焚燒シ
 て。父母兄弟姊妹を知らず。猶シ猪狗の如シ。更に相荷
 擔シて。復慙愧ナシ。四ハ貪嬌の人ハ不淨女人の膿ヲ
 血を飲ム。無量劫ニ於て。常ニ胞胎ニ處シて。生藏ト熟
 藏トと子藏トの諸蟲を以て衣服ト。女根を啖喫シて。
 用て飲食トす。五ハ貪嬌の人ハ心利刀の如シ。眼火
 車の如シ。功德行の藏を割截シ。燒滅ス。六ハ貪嬌の
 人ハ結使ハの火。貪欲の薪ニ起て。意を剥き奪ハんと欲
 す。猶羅刹の如クにして。慙愧を生せず。但不淨の事を
 説き。沙門の所ニ到れトモ。歸依を知らず。諸の情根を

動かし、膠ニカの草カサ著くか如し。欲染の種子。意根を圍繞して。六情の火起て。善の種子を焼き。前世の梵行白業を破滅す。手と舉げ足を動かす。猶利刀の如し。眼猛火の如く。口羅刹の如し。遍體の毛孔。姪火に使はる。七の貪姪の人は。八種の業を作る。殺生と殺生の具の刀。劔杖等を作ると。男女を和合せると。大妄語をなすと。酒を飲み歌頌し。姪の境界をなすと。或は一切寶器を偷みて。蟲聚不淨の身を莊嚴すると。心王の爲に使はると。眼根の惡狗。臭穢を偷み噉ふとなり。八の貪姪の人の姪の爲に使はれ。心大火の如し。赤鐵聚の如し。

直に陷墜して。梵行清淨行を破滅し。必ず地獄に隨す。九の貪姪の人の身壞し命終して。貝珠を擲つ頃に。必定して當に赤銅地獄に墮し。銅花林の如く。下に鐵牀あり。牀上に又熱鐵の八楞の柱あり。柱端に鏡あり。鏡中に自然に諸の女像あり。或は男形となり。姪人愛念して。諸の情根を動かし。同時に火起て。銅花化して。大熱鐵の釘とある。銅柱變じて。沸銅ツボク鑊湯カウとなる。鐵牀に火燃て。女化して狗となる。男化して刀となる。罪人を驅り蹴りて。無量の苦を受て。熱鐵丸を噉ふ。洋銅を吞飲して。死を求むれとも得ず。無量歳を経て。壽命一

劫あり。十ふの貪姪の人。佛を見るとを得ず。重雲の障の如し。梵行を破するか故に。必定して當に阿鼻無間と云。地獄に墮すへし。身獄中に漏て。壽命一劫なり。左お右は宛ま轉んじて復一劫を経。時に閻羅王。罪人を呵責して曰。汝姪欲を樂しんて。今此苦を受く。此事樂しまや否や。汝今復當よ百千万劫。他人の債を償ふとも。終に盡すへからず。地獄より命終して。鳩鴿の中に生じ。龍蛇の身を受く。梵行を汗する故よ。百生千生。佛を見ず法を聞かず。遂に道を得ずと。説給へり

次よ持戒の功德を示さへ。能く此戒を守る者の。禮度

内よ定まりて。徳外に溢る。閻門の内。人の知らざる所なれとも。此道正しけれ。神祇守護あり。妻妾妬忌するも無く。眷屬意に従て。家に繼嗣絶えす。孝子順孫の風長く傳へり。親族和し長幼序あり。當來に人天勝妙の果報を得。遂に佛果に至るを得。故に佛。此戒を制し給ふ

不妄語とい。妄語とい。已れ未だ悟らすして。悟りたりと云ひ。或の佛と感見すと云ひ。或の神祇と談話す杯と。無實を云ひ。大妄語にして。重罪なり。其外見しとを見すと云ひ。聞しとを聞かすと云類。小妄語にして。

輕罪なり。凡そ心に違ひて語を出す。一切皆妄語なり。夫れ妄語の。其心虚誑にして善法を受ると。譬へハ覆瓶に水の入らざるか如し。善戒輕の偈に曰。妄語大毒害。燒壞人天福。遊行阿鼻獄。刀輪爲脚足。鐵毒蛇爲舌。無量億千劫。求出無由脫。説給へり。適人間は還生すれハ。盲聾瘖瘂百病を衣服とす。次に不妄語の功德と示さハ。不妄語とハ。即眞實語なり。眞實語ハ。即佛語あり。故に大威力を具するなり。華嚴輕音義に曰。中天竺國の南に國あり。其國劫初より已來。妄語するとかと。若妄語する者あれハ。擯出す。此

不妄語の徳に依て。小國なれども。他國の爲に侵擾せらる。となし。若他國より攻來る時ハ。眞實語を説て呪願すれハ。敵の兵器悉く銷融するも。火の膏を銷するか如し。故に銷融國と名つくと云り。此戒を^{持て}ハ。他は尊信せられ。後に聖位お昇て。廣長舌相を得て。説法自在ふして。能く他を度す。故に佛。此戒を制し給ふ。不綺語とハ。綺とハ。故邪おして順ならざるを云。曰。其言質直を失ひ。戲論に屬するを。綺語と云。新譯にハ。無義語と翻す。又ハ。雜穢語と云。輕口狂言。狂詩狂歌。情詩情歌の類を云。此戒ハ。他の歡笑を取らんる爲。人の

常に犯し易き所にして、其悪たるを知らざる者多し。持地論に曰、何か故に無義語の者、地獄に墮するや、語既に義に非ず、事悉く彼を損す。此故に地獄の苦を受く。地獄を出て、畜生の身を受く。又餓鬼となると。又十善業道經に曰、綺語の者、上と反して下となし、下を反して上となす。調戲テウキ節なく、巧言佞辭、無益の語、不利の語、無義の語を説き、五欲を讚歎する語と、心不明了の語と、黑暗の語と、刺の如く、林の如く、衆生を釣コウ縛バクす。此人命終して、當に刺林地獄に墮すへし。百千の鐵刺、舌を鉤カキし出して、百千段となすと説給へり。還て人中に

生すれり。二種の報を得。一に、所有の言語、人信受せず。二に、言説する所あれとも、明了なると能はず。又禾穀及び資財等の損害を得るなり。之を反して、不綺語の功德の相を明さし。十善戒經に曰、若能く綺語せされり。口恒に妙香を出すと。猶青蓮花の香の如し。生處佛に遇ふとを得。口業實の如く清し。大集經に曰、復不綺語の十功德と者。一に、天人敬愛す。二に、朋人隨喜す。三に、常に實事を樂ふ。四に、朋人嫌はず。五に、語を聞て能く喜ぶ。六に、常に尊重を得。七に、は空寂を愛樂す。八に、賢聖の默マクを愛す。九に、惡人を

厭離す。十に死して善道に生ず。此善根を以て。無上
 菩提に廻向すれ。久しからずして。無上智を證し。端
 正の衆生。其國に來生すと説給へり。故に佛。此不綺語
 戒を制し給ふ。
 不惡口とは。他を侮り。麤言を以て罵詈するを云。此惡
 口の卑劣なるを知て。口業を慎み。柔軟語を順する
 を。不惡口と云。無畏三藏曰。麤惡とい。言説する所あり
 能く他の心をして。順せさらしめ。不善の心を生せし
 め。或は高聲を相と現す。謂ゆる麤獷等なり。菩薩常は
 柔和善順にして。卒暴ならざるべし。宜説する所あれ

は。前人の心を悦可せしむ。此因縁を以て。能く漸漸に
 彼を攝して。佛道に入らしむべし。然るを今違惱の因
 縁を作す。即是れ四攝の方便。乘違すとの給へり。
 又十善戒經に曰。惡口の者。口は香を含むと雖とも
 臭きと死屍の如し。常は樂て。他の不善の事を説く。口
 は吐説する所。刺の如く。刀の如く。劍の如く。戟の如く
 屎の如く。尿の如く。蟲の如く。膿の如し。天人中の香し
 きは。善語を過ぎたるはなし。三界の中の臭きは。惡口
 に過ぎたるはなし。惡口の人。曰。説く所あれ。鐵
 丸を雨らして。他家を焚燒するが如し。此人未來に。大

地獄に墮し、熱鐵身を焼き、熱鐵汁を飲む。設ひ世間よ生るるも、病癩の狗、病癩の人となる。無量劫の中に、恒に膿血を飲む。心の念する所へ、純に是れ不善よして、惡と相應すと説給へり。之に反して、不惡口戒を持つ功德の相を明さん。大集經に曰、又不惡口の十功德と者。一、よの柔軟語と得。二、よの捷利語。三、よの合理語。四、よの美潤語。五、よの言必中を得。六、よの直眞語。七、よの無畏語。八、よの不敢。九、よの輕陵語。九、よの法語清辯。十、よの死して善道よ生ず。是を十種の功德と名づく。若能く此功德を以て、無上菩提に廻向すれば、是人久しからむ。

して、無上智を證し、法聲充遍して、諸の惡語を離ると説給へり。故に佛、此不惡口戒を制し給ふ。

不兩舌と云、兩と云、兩人兩家等を指す。舌とは、言説なり。所謂此人の語を彼に傳へ、彼人の語を此に傳へて、彼此の親好を破するを、兩舌と云。菩薩大人へ、友愛親好の心、尤も深かるへし、誤ても他の親好を破するの語を作ささるへし。新譯よは、離間語と云。十住心論に曰、又妄語に依て、即兩舌を致す。今身の言に慈愛無く、讒謗し毀辱し惡口し雜亂し死して當よ拔舌洋銅犁耕地獄よ墮すへし。退却の中よ於て、諸の苦惱を受く。

苦を受け畢て。畜生の中に墮じて。糞穢を噉食し。鵝鶻カウカウ鳥の如く。舌根あるとなじ。此中よ在て。無量お生死す。若微善に依て。偶人間に還生すれども。舌根を具せず。口氣臭惡おして。瘡癩饞澀。齒齋白ならず。若善言あるも。人信用せずと。又此兩舌の餘業に依て。田林國土。五穀華果。茂盛ならず。道路に瓦礫嶮岨多し。之お反じて。不兩舌の功德の相を示さは。十善業道經に曰。若兩舌を離れぬれり。五種の不可壞の法を得へし。一あり不壞身を得。能く害する者無きか故に。二よは不壞の眷屬を得。能く破する者無きか故に。三にあり不壞信を得。

本業お順するか故に。四あり不壞の法行を得。所修堅固なるか故に。五よは不壞の善知識を得。誑惑せざるか故なり。若能く無上菩提よ廻向せり。後成佛の時。正眷屬を得。諸魔外道。沮壞するに能はずと。故に佛。此戒を制し給ふ。不慳貪とい。慳とい。慳慳タクメフケシムなるにて。物を惜むなり。貪とい。惣して六塵の境界よ染著し。貪著するを云ふ。此戒の相に。内外六塵の境界。及び男女資財よ於て。虛假無常なるを知り。少欲知足の法に隨順するを。不慳貪と云ふ。十住心論に曰。今身慳貪おして。布施せされり。

死して即當ふ沸屎地獄ヒ墮すへし。退劫ヒの中に於て。諸の苦惱を受く。苦を受け畢て。畜生餓鬼の中に墮し。衣食の資あると無し。人の棄る所の糞穢を仰けとも。與へされぬ得ず。此中ヒ於て。無量に生死す。若微善ヒ依て。適人身に復すれども。飢寒裸露ヒ困乏にして常ヒ無し。人既に與へされぬ。求むれども亦得ず。設ヒ纖毫ヒを得るも。輒ち剝奪ヒ遇ひて。守り苦しみて方なし。身を亡じ命を喪ヒと云へり。之ヒ反じて。不慳貪の功德を明さぬ。十善業道經に曰。若貪欲を離るれぬ。則五種の自在を成就す。一ヒの三業自在なり。諸根具足ヒを

る故に。二ヒの財物自在なり。一切怨賊奪ふと能ヒさるる故に。三ヒには福德自在なり。心の欲する所。物ヒ從ひて皆備ヒるる故に。四ヒの王位自在なり。珍奇妙物。皆奉獻するヒ故に。五ヒの得る所の物。求むる所ヒ勝ると。百倍殊勝なり。昔の時に於て。慳嫉せさるヒ故に。若能く無上菩提ヒ廻向すれヒ。後成佛の時。三界に獨尊ヒして。皆共に敬養ヒやると。今時偶福報の人ありて。得る所。求むる所ヒ勝る者あるヒ。此戒徳の餘報なりと知るへし。又雜集論ヒ准するに。不貪欲ヒ依るヒ故に。不貪の徳を増長す。又園林菓實等豐盈ヒして。不

熟の災なしと云へり。故に佛此戒を制し給ふなり。不瞋恚といふ。憤瞋忍恚して意ふ違するの境に對して。損害の心を起し。自他を損惱するを瞋恚と云ふ。凡そ世を治め人に長たる者。尤も此戒を慎み守ふべきなり。無畏三藏の曰。若菩薩は人ありて來て種種に害を加へ。乃至支分を斷載すとも。猶彼を害する意を生ぜざれ。況や此より輕きをや。若然らざれば。菩薩に非ず。應に一切處に遍じて。大忍を行すべし。若他種種に害を加へん時。應に自ら念すべし。我前世の無明の因縁に依て。此有患の身を生ず。又無量世より來た。恒に

他を惱ます。故に今則業熟して。此報を受く。何を前人を怨み咎めんや。是の如く種種に正觀すべし。又念すべし。此身は縁より生じて。性あると無し。我人あるとなし。誰か害し誰か受けん。此實相觀を以て。彼を害するの心を生ぜざれ。是れ此瞋主の念は。則是れ衆惡の具なり。能く是の如く觀念するを以ての故に。心常に歡悅して。善寂自然にして。我人諸法に著せず。而も恒に平等なり。此平等の。則是れ怨親不二なり。有益無益輕重の人。一切平等にして。心は増減なく。而も心を生じて。諸の惡業を造らず。恒に饒益利他の行を行し

て等しく世間を觀すると猶ほ一子の如くなるか故に。此菩薩正しく實相を觀じて。此心の本性清淨を照了するを以ての故に。十住心論に曰。今身若瞋恚の者の死して當に泥犁地獄に墮すへし。歷劫の中は於て具は衆苦を受くへし。受苦既は畢て。畜生の中は墮して毒蛇ハク。蚊ハク。蠅ハク。虎豹豺狼ハクとなる。此中お在て無量は生死す。若人間は復生すれば瞋恚多く。面貌醜惡にして。人は憎惡せらる。唯親友せられざるのみならず。實は亦眼は見るとを喜びすと云へり。之は反じて。不瞋恚戒の功德の相を示さる。受十善業道經に曰。若瞋恚を離

るれば。則八種の喜悅心の法を得へし。一には損惱の心なく。二は瞋恚の心なく。三には諍訟の心なく。四には案和質直の心あり。五は聖者の慈心を得。六はは恒は利益して。衆生を安んずる心をなす。七は身相端嚴にして。衆共は尊敬を。八は和忍を以ての故。九は速は梵天に生を。若能く無上菩提を廻向せば。後成佛の時。無礙心を得て。見る者厭ふと無しと。故に佛此戒を制し給ふ。不邪見といふ邪は。正に對するの名として。邪に僻みたるとなり。見といふ心に見定むる所あるを云ふ。所謂因

果善惡の眞理を撥無し。此僻みたる見處を定めて佛
 なく聖なく阿羅漢無きと計度するを邪見と云ふ。邪
 見の恐るべきを知りて正知見に隨順するを不邪見
 と云なり。正知見とは即因縁生の諸法の無自性あり
 て吾我あると無く空無相にして而も善惡の因果宛
 然として苦樂邪正の理條然たるを水火の相の燎然
 として見つべきが如く而も燎然見つべしと雖も
 其自性不可得なるを鏡像水月の如し。此理を明了覺
 知して斷常有無の邊見を墮せずして貧隕癡慢を離
 るるを中道の智即正知見と云なり。故に諸佛菩薩の

廣大の功德を信心幽冥鬼神の畏れ敬ふべきを證知
 して慈悲恭謙あるを眞の正知見と云。此正知見無く
 して邪見は隨順する者。生生乃處常に地獄の中ま
 在り。故に受十善戒經に曰。身壞じ命終じて終に大地
 獄に隨じて無量劫を経て若し受ると窮りなし。百千
 の諸佛も救ふみを得ると能はず。諸佛此謗法の罪人
 の十方界の地獄と共に生じ。地獄と共に滅するを觀
 む給ふと。十住心論に曰。今も邪見ありて人の聽法誦
 經を遮遏し。自ら貪採せされぬ。死して當に墮癡地獄
 に隨すへ志。還劫の中於て諸の若惱を受け。苦を受

け畢て畜生の中に墮じ。三寶四諦の聲を聞けども。是れ善なりと知らず。殺害鞭打の音。是れ惡なるを知らず。此中お在て。無量お生死す。若人身お復生すれん。人中に在て。聲響（ミナトナリ）あして聞らざると。石壁と異ならず。美言の響絶て。覺知せざるが故に。又持地論に。二種の果報を説り。一は邪見の家に生じ。二は其心詭曲なりと。又雜集論に曰。邪見の故に。某味辛苦なり。或は全く果なし。是れ彼の增長果なりと云り。之に反して。不邪見の功德を明さは。十善業道經に曰。若邪見を離るれば。則十功德を成就するを得。一には眞善の意樂。

眞善の等侶を得。二は深く因果を信じて。寧ろ身命を殞するも。遂は惡を作さず。三は唯佛に歸依して。餘の天等も非ず。四は直心正見にして。長く一切吉凶の疑網を離る。五は恒に人天に生じて。惡道を受けず。六は無量の福慧轉た増勝す。七は長く邪見を離れて。正道を行す。八は身見を起さず。諸の惡業を捨つ。九は無礙見に住す。十は諸難に墮せず。若無上菩提に廻向すれん。後成佛の時。速に一切の佛法を證して。自在神通を成就すと。雜集論に曰。不邪見に依て。自身の衆具興盛なるを感得す。所謂妻子貞良孝。

順よして心よ適ふ。又外事興盛なるを感得す。所謂菓
味成熟豊盈なるなり。若無上菩提よ廻向すれば。當來
必す速よ一切智を得て。法界の衆生を利益す。故よ佛。
此戒を制し給ふなり。

受十善戒作法諺詮卷上終

受十善戒作法諺詮卷下

苾芻雲 照述

上來畧して。懺悔及び三歸十善戒作法の文を別釋し。并
お其因果罪福の相を明し畢ぬ。

次よ總して。廣く三歸十善の功過等を明すへし。中に於
て。初に三歸の功德を明さし。希有校量功德經に曰。佛阿
難に告て曰。若人有て。四天下に滿る。阿羅漢を。四百年の
間。飲食衣服臥具醫藥を以て供養し。若涅槃の後。お舍
利を收めて。七寶の塔を建て供養せん。功德廣大なりと
雖とも。若人有て。淳淨の心を以て。三歸を受る功德を。百

分十分百千萬億分にして。其一よも及はす。又四天下よ
 充滿せる辟支佛を供養すると前の如くするも。三歸の
 功德よ及はす。又假使三千大千世界よ滿る諸佛如來を。
 二萬歳の間供養する功德も。三歸の功德よ及はす。三歸
十方世界に滿る諸佛と。三世三際の諸佛と。及ひ其諸佛
所説所證の一切の法門と。其諸佛所度の聖弟子。阿羅漢
菩薩との。三寶よ歸依するか故ふ。唯三千界よ滿る。佛の
一寶よ歸依するふ。勝るゝあり。又有限心と無限心と差
別心と平等心と 百倍千倍萬倍よして。算數譬喩も。及ふ
 と能はすと。復曰。若人三歸を受畢て。乃至一彈指の頃も。
 能く十善戒を受け已て。修行すれは。無量無邊の功德を
 得と。若復人有て。能く一日一夜八齋戒を受已て。説の如

く修行する所得の功德は。前の功德よ勝ると。千倍万
 倍よして。乃至算數譬喩も。及ふと能はすと云り。雜阿含
 經よ曰。懷妊マツルせる者の胎内の子の爲よ。三歸を受けしむ
 れは。子生じ已て。正知見ありと。大集經よ曰。妊身の女人。
 胎安からさるとを恐れは。先つ三歸を受已れは。兒安穩
 よして。生れて後も。身心具足して。善神擁護すと。賢愚經
 よ曰。昔五百人の商人あり。船よ乘て大海を渡るよ。摩竭
 大魚出て。船を呑んとするよ。三歸を唱へしかは。其難を
 免れたりと。又昔小兒あり。曾て三歸を受たる者なり。或
 時獨深山よ入るよ。大鬼神あり。小兒を取り噉クハへんとす。

小兒恐れて三歸を唱へしかハ鬼神慈悲心を生じて害
 すると無かりつと云り。觀無量壽經ハ往生淨土の三福
 を説給ふ中ハ一ハ父母ハ孝養シ師長ハ奉事シ慈心
 ありて殺さず十善業を修す。二ハ三歸を受持して衆
 戒を具足シ威儀を犯さず。三ハ菩提心を發シ深く因
 果を信シ大乘を讀誦シ行者を勸め進む。此の如くの三
 事を名付けて淨業とすと云り。然れハ三歸を受持する
 ハ往生淨土の行の一なり。淨嚴阿闍梨曰。今世ハ一等邪
 見の愚人あり戒を守り大乘の經陀羅尼を讀誦するを
 ハ雜行なりと嫌ひ捨て餘の殺生食肉等の惡雜行を嫌

ひ捨さるハ無間の業恐るべきとなり。悲哉悲哉と云り
 今謂く他宗も亦戒脈と法脈との二の相傳あり。曰戒
 脈ハ即戒門なり。法脈ハ即乘門なり。乘戒の二門離るへ
 からさると猶車體と駕御との如し。誰か之を雜修と云
 へけんや

次ハ總して廣く十善戒法の功德と及ハ破戒の過患と
 を明さハ智度論ハ曰。譬ハ足なくして行かんと欲シ
 翅無くして飛んと欲シ。船無くして度らんと欲するか
 如し。是れ得へからず。若戒なくして好果を求めんと欲
 するも亦復是の如し。若人此戒を棄捨せハ山居して苦

行し。果を食し。藥を服すとも。禽獸と異なるとなし。或ハ人あり。但水を服して戒とし。或ハ乳を服し。或ハ氣を服し。或ハ髪を剃り。或ハ髪を長くし。或ハ頂上ハ少許の髪を留め。或ハ袈裟を著し。或ハ白衣を著し。或ハ草衣を著し。或ハ木皮を著し。或ハ冬水ハ入り。或ハ夏火ハ炙り。若ハ自ら高巖より墮し。若ハ恒河の中ハ洗ひ。若ハ日ハ三たび浴し。再ハ火を供養し。種種の祠。種種の呪術の行を受て。苦行するも。此戒なきを以て。空しく得る所無し。若人あり。高堂大殿ハ處し。好衣美食すと雖とも。能く此戒を行せし。好處ハ生ずるとを得。及ハ道果を得ん。若ハ貴

若ハ賤。若ハ小若ハ大。能く此淨戒を行すれハ。皆大利を得。若此戒を破らハ。貴となく賤となく。大となく小となく。皆意ハ隨て。善所ハ生ずるとを得ず。復次に破戒の人ハ。譬ハ清涼の池に。而も毒蛇あれハ。中ハ於て澡浴せざるか如く。亦好き花果樹にして。而も逆刺多き如し。若人貴家ハ在て生れ。身體端正ハして。廣學多聞かりと雖とも。而も持戒を樂はず。慈悲の心なきも。亦復是の如し。偈ハ説くか如し

貴而無智則爲衰
持戒之人而毀戒

智而憍慢亦爲衰
今世後世一切衰

人貧賤なりと雖ども。而も能く戒と持て。富貴ふして。而も破成の者に勝れたり。華香木香の。遠く聞ゆると能はず。持戒の者の。香十方に遍す。持戒の人の。安樂を具足して。名聲遠く聞ゆ。天人敬愛す。現世に。種種の快樂を得。若天上人中にして。富貴長壽を欲せ。之と取る。難からず。持戒清淨なれ。所願皆得。復次に持戒の人の。破戒の人の。刑獄拷掠し。種種に苦惱するを見て。自ら永く離るるとを。知り。此事を以て欣慶を爲す。若持戒の人の。善人の譽を得。名聞快樂なるを見て。心に自ら念言。すらく。彼れ譽を得る如く。我も亦分ありと。持戒の人の。

壽終の時。刀風身を解き。筋脈斷絶すれども。自ら持戒清淨なることを知り。心怖畏せず。偈を説くか如し。

- 大悪病中 戒爲良藥 大恐怖中 戒爲守護
- 死暗冥中 戒爲明燈 於惡道中 戒爲橋梁
- 死海水中 戒爲大船

復次に持戒の人。常ふ今世の人の敬養せらるるとを得。心樂て悔せず。衣食乏しきとなく。死して天に生すると。を得。後佛道を得。持戒の人の。事として得さるとなし。破戒の人へ。一切皆失す。譬へ。人常に天を供養するか如く。其人貧窮なれとも。一心に供養して。十二歳を漏ちて。

富貴を求索す。天此人を慙み。自ら其身を現して。而も之に問て曰。汝何物を求むるや。答へて曰。我れ富貴を求め。心の所願をして。一切皆得んと欲す。天一器を與ふ。名つけて徳瓶と云ふ。而も之に語て曰。所須の物。此瓶を覆さへ出つと。其人得已て。意の所欲に應じて。得ざる所なく。意の如くなるを得。已に具ふ。好舍象馬車乗を作り。七寶具足し。賓客を供給するに。事事乏しきとなし。客之に問て曰。汝先にい貪窮なるよ。今日須ふる所。此の如くの富を得るや。答て曰。我れ天瓶を得。瓶能く此種種の衆物を出す。故に富むと是の如し。客の言く。瓶を出し。并ふ出

す所の物を見示せよと。即爲瓶を出し。瓶中より種種の衆物を引出す。其人僑佚ケイツおして。瓶上フコトナドお立て舞ふ。瓶即破壊し。一切の衆物。亦一時に滅す。持戒の人も。亦復是の如し。種種の妙樂。願として得さるとなし。若人戒を破し。僑佚して。自ら恣なるも。亦彼人の。瓶を破して。利を失ふか如し。復次に持戒の人。人の樂ふ所を施して。財物を惜まず。世利を修めず。而も乏しき所なくして。天上に生するを得。十方の佛前よして。三乗の道に入り。而も解脱を得。唯種種の邪見の持戒へ。後得る所なし。復次お若人出家せずと雖ども。但能く戒法を修行せへ。亦天に生す

七十七
るを得。若人持戒清淨。禪定智慧ありて。老病死苦を度
脱せんとを求めんと欲せし。此願必ず得。持戒の親より
も親し。死すと雖とも離れず。持戒の莊嚴は。七寶に勝る。
是を以ての故に。當に此戒を護ると。身命を護るか如く。
寶物を愛するか如くすへし。破戒の人の苦を受ると萬
端なり。向の貧人の瓶を破して物を失ふか如し。復次に
持戒の人の破戒の人の罪を觀て。應に自ら勉め勵まし
て。一心に戒を持つへしと云り。謹て諸の善男善女。諸佛
子に告く。諸佛子の是れ何人そや。今此人間世界は生を
受ると。微少の因縁に非ず。就中此五濁惡世の中。正法將

に亡ひんとするの日。善説法律の中に入りて。眞正に大乘
菩薩の十善戒を受け。既に菩薩の數に入り。菩薩の位に
昇り。位大覺に同じ。眞に是れ諸佛の御弟子たるとを
得たるも。多生曠劫の中に。誠に是れ難得難遇。大歡喜の
時なり。此時出離解脱の勝功德善本を植すんは。何れの
時あか。解脱を得んや。今此論は。十善性戒の功德を。稱揚
讃説し。及び破戒の罪惡を。呵責勗誠し給ふは。他人は非
ず。即諸佛子。十宗各派の根本高祖。龍樹大菩薩の嚴敕な
り。今此論は。大乘の菩薩の六波羅蜜の中の。戒波羅蜜の
釋文なり。誰の此高祖の誠言。般若の法門を以て。不急の

長語なりとするを得んや。若介爾も。高祖の誠言を信
 なりとせし。誰か此誠勗を外よして。佛道を求むへけん
 や。又他の外教等。天堂に生せんを願へとも。若此戒を
 持せずして。彼好果を求むるは。船無くして渡らんと欲
 し。足なくして行かんと欲するが如く。決して得へから
 さると。明なり。何となれは。高祖龍樹菩薩は。但佛教の祖
 たるのみに非ず。初百歳は。外教の宗義を攻め給ひて。其
 極底を探り。外教の無益にして。復其苦行の空しく所得
 なきとを。自ら覺知し。外教を捨て。此正法毘那耶を研究
 し給ふと。亦一百年あり。後大乘般若の法門を。勤學し弘

通し。及び秘密乘あり給ふ。されは内外二教。及び大小
 顯密諸乘の人。誰か此誠誠を。仰信せざるへけんや。故よ
 本論に又曰。此戒を破する者は。三惡道の中に隨す。若下
 品の持戒は。人中に生し。中品の持戒は。六欲天の中よ生
 し。上品の持戒よして。又四禪四空定を行すれは。色無色
 清淨の天中に生す。上品の持戒よ三種あり。下の清淨の
 持戒は。阿羅漢を得。中の清淨持戒は。辟支佛を得。上の清
 淨持戒は。佛道を得。不破不缺は。聖の讚愛し給ふ所なり。
 是の如きを名つけて。上品の持戒清淨と云。若衆生を慈
 愍するか故に。衆生を度せんか爲の故に。亦戒の實相を

知るか故よ。心倚著せず。此の如く戒を持つて。將來佛道
 に至る。是の如きを名つけて。無上佛道戒を得とす。若人
 大善利を求め。當に堅く戒を持つと。重寶を惜むか如
 く。身命を護るか如くすへし。何を以ての故に。譬へ。大
 地の一切の萬物。有形の類の如き。皆地よ依て而も住す
 戒も亦此の如し。戒を一切善法の住處とすと。又曰。佛法
 の大海の。信を能入とし。智を能度とすと。若此般若の信
 智なき。即魔説にして。正法に非す。又生死能度の法門
 に非す。謹て告く。一切佛弟子たるの人。此十善の淺畧な
 り。彼の圓頓戒や。祕密の戒や。深大なりと云て。此初入佛

法の戒門を閉て。彼深法を求むる。波面に依らすして。
 水底に入り。門戸よ由らずして。堂奥に登らんとを求む
 るか如し。誰か是と智とせんや。狂よあらずん。則癡な
 らん。般若の法門。此人の爲に。覆沒せらる。已上與門切に
 約す請ふ。早く彼邪説を棄て。此正法毘那耶の。十善行を遵行
 勤修して。即今道德の破壊を彌縫し。人倫の危急を救濟
 し。如來の正法を光顯し。法身の慧命を蘇生して。佛祖及
 ひ四恩の鴻徳を。報答せられんとを。若然らすん。如來
 の正法を滅沒せん。他人に非るあり。况や善無畏三藏。
 此十善戒を釋して曰。三世の諸佛。皆此道に由て。菩提に

至り給ふ。故に修行道と名づく。何を以てか故よ。今此戒
 の。即是れ一切衆生の。自性本源の戒なり。若此性淨金剛
 の戒よ住すれば。自然に一切法に於て。而も通達すると
 を得るなり。次に佛其戒相を告給はく。謂く生命と殺さ
 す。與へざるを而も取り。欲邪行し。誑語し。惡口し。兩舌語
 し。綺語し。及び貪ふ。瞋し。邪見する等を得され。即是れ菩
 薩の戒かり。此中の不殺とハ。謂く一切の有命の類よ於
 て。乃至一念の殺心をも生せされ。殺心なきを以ての故
 よ。不殺戒と名づく。餘ハ此よ傲ひて説くへしと。今此誠
 言に依るハ。此十善戒ハ即是れ佛性戒よして。性淨の金

剛戒なり。此を捨て更よ外よ。祕奥の戒あるよ非ず。當よ
 知るへし。但行者。麁暴心を以て護持すれハ。則人天聲聞
 等の麁戒となる。若行者。無上の善妙の心を以て護持す
 れハ。則無上善妙の金剛戒とある。大小淺深の戒。及び人
 天有漏の戒の差別を見るハ。則見る者の心の。麁漏ある
 ハ由るなり。此一切衆生自性本源の戒に於て。初より淺
 深勝劣あるハ非ず。諸の善男子善女人等。此戒ハ即自心
 の佛性の相貌あるとを。了了に覺知し。得意忘言して。深
 思觀察し。自ら反省する所あれ。是れ奪門の意あり
 問謹て如上の所説を聞き。受戒の功德廣大なると。既に

了知せり。然るに末代下根の吾人。此淨戒を護持するの堪へず。故に寧ろ此難行を捨て。易行の法に從はんと欲す。如何

答此十善戒の。人の人たるの道にして。世間の法律上も。其麤分を制し輪王も是に由て。四海を治む。誰か是を難しとして。一向に護持せずして。他に易行を求むへけんや。亦是れ法律の免さざる所なり。但法律上。其外部を制して。内徳を問はず。今此十善の。内徳を先として。外部に及ぼす者あり。撥無邪見の人。置て論せず。若介爾も。道德因果の説を信する者にして。誰か此戒を難しと

して。捨つへけんや。況や又上より引く所の。佛説未曾有因縁經に由るに。下品の十善の。百歩を行くの間。中品の十善の。一食項。上品の十善の。且より食時に至る。此時中に於て。心は十善を念して。十惡を止むへこと云り。是を易行法とす。又彌勒上生經に曰。當れ一日より。第七日に至て。念を彼天に繋けて。佛の禁戒を持ち。十善を思念し。十善道を行し。此功德を以て廻向して。彌勒佛の前より生せん。願はれ念に隨ひて。往生すと云り。是を第二の易行法とす。觀無量壽經も。亦同じく之を説けり。是の如く十善戒法の。最易行法にして。而も廣大無邊の功德あると

を知らず。誰か受戒するを欲せざるへけんや。然るに世に戒法を受けずとも。品行正しければ。受たるも同様にして。強ちに受くるに及はすと云人あり。是の上云如く。戒善と妙善との不同を辨へ知らざるの故なり。所謂戒善といふ。此戒體を成就する者なり。其身内より。防非止惡の功德を成就せる。無表の戒體ありて。善惡無記の三心。及び無心の時よりも。此善法の功德の戒體は。念念運運より倍増して。息む時無し。亦能く六塵の境に對して防非止惡の功用を。增長するなり。豈に尊とからずや。又若此戒體なきは。沙門釋氏に非ず。又優婆塞優婆夷に非ず。都

て是れ佛弟子に非ると。涅槃の遺教明なり。然るに今此三歸戒。及び菩薩戒等を受る者あり。既に是れ佛弟子なるを以て。諸佛菩薩。及び護戒神ありて。晝夜も行者を衛護し給ふとを。聞知せざるの爲より。受るに及はすと云るるへし。故に今畧して。之を擧示せん。七佛所說神呪經に曰。三歸を受る人あり。九神ありて衛護す。佛に歸するは三神あり。一は陀摩斯那。二は陀摩婆羅那。三は陀摩流支と云。法に歸するは三神あり。一は法寶。二は呵責。三は辨意と云。僧に歸するは三神あり。一は僧寶。二は護衆。三は安穩と名つくと云り。又大灌頂神呪

經に曰。鹿頭梵志と云者あり。佛に問て曰。我今三歸五戒を受けんと欲す。佛宣ひく。善哉善哉。無始の罪を懺悔して。三歸を受くべしと。即教の如く懺悔して。三歸を受け。畢ぬ佛告給ひく。我當よ汝及び十方の人の。三歸を受る者に。天帝釋の遣す所の。諸の鬼神に敕して。男女の三歸を受る者を。護らむべしと。即三十六神の名を説て曰。四天王の遣す神を

- 一を善光と名く 疾病を主る
- 二を善明と名く 頭痛を主る
- 三を善力と名く 寒熱を主る
- 四を善月と名く 腹痛を主る
- 五を善現と名く 腫を主る
- 六を善供と名く 癪狂を主る

- 七を善拾と名く 愚癡を主る
- 八を善寂と名く 瞋恚を主る
- 九を善覺と名く 姦欲を主る
- 十を善天と名く 邪鬼を主る
- 十一を善住と名く 傷亡を主る
- 十二を善福と名く 冢墓を主る
- 十三を善衍と名く 四方を主る
- 十四を善帝と名く 怨家を主る
- 十五を善王と名く 偷盜を主る
- 十六を善香と名く 債主を主る
- 十七を善施と名く 劫賊を主る
- 十八を善意と名く 疫毒を主る
- 十九を善吉と名く 五瘟を主る
- 廿を善山と名く 蜚尸を主る
- 廿一を善調と名く 注連を主る
- 廿二を善備と名く 往復を主る
- 廿三を善哉と名く 相引を主る
- 廿四を善淨と名く 惡黨を主る
- 廿五を善品と名く 蠱毒を主る
- 廿六を善語と名く 恐怖を主る

廿七を善壽と名く厄難を主る

廿八を善海と名く産乳を主る

廿九を善願と名く縣官を主る

卅を善國と名く口舌を主る

卅一を善照と名く憂惱を主る

卅二を善言と名く不安を主る

卅三を善主と名く百怪を主る

卅四を善藏と名く嫉妬を主る

卅五を善音と名く呪詛を主る

卅六を善妙と名く厭禱を主る

佛梵志よ告給へく。是を三十六神王と名つく。此諸の善神。凡そ萬億恒沙の鬼神有て。眷屬とし。相を隠して番代よ。三歸を受けたる。男子女人を守護す。當に神王の名字を書して。守よ掛れへ。他國の往來等よ。邪魔を避除し。不善を消滅すと云へり。此は是れ別して。三歸守護の神王

を擧るなり。而も實に。十方三世の一切諸佛菩薩。緣覺聲聞。無量恒沙の諸尊。及び無邊の一切の諸天善神等の。衛護を受る功德。無量無邊。不可數量なり。故に上に引く所の。校量功德經の聖說の。妄誕ならざるの理を。推測して。識知すへし。嗚呼。彼無信仰の人。憐むへきに非すや。經に曰。若佛子。一切の城邑舍宅。入て。一切の人を見て。唱へて言ふへし。汝等當に。三歸十戒を受くへしと。若牛馬猪羊。一切の畜生を見て。當に心お念し。口に言ふへし。汝は是れ畜生なれども。菩提心を發すへしと。諸佛子。固く此意を得て。菩薩三聚の十善戒を護して。早く衆生

を救度し。正法を廣布せよ。法衰を憂ふると勿れ。已か護
法利生の心の乏しきを憂悔せよ

後よ展轉問答料簡せよ

問て曰。如上十惡業破戒の罪惡の相を聞くよ。身毛豎立
して。實よ厭離心を生ずるに堪たり。又僅に少時の善因
よ依て。天堂淨土よ生ずるとを得ると。欣仰するよ堪た。
り。然れども憂國公子曰。釋迦の多辯よあて。功德を説き
孔丘の謙よあて。自ら下れりと。此語を以て佛語を測る
よ。善惡因果の説。或は荒誕よ過きて。實理に合はざる者
あるよ似たり。況や即今書生輩。哲理に合はざる者の。總

て取るに足らざる者とす。如何

答學問の道へ。必ず推測を以て基とす。推測の法は。現量
の法を以て。非現量の法を測知するよ在り。故に智度論

よ曰。昔一時。佛舎婆提國よ於て。受歲と安竟る居あり

阿難佛よ從て。諸國よ遊行し。婆羅門城よ到り給ふ。婆羅
門城の王。佛の神徳有て。能く衆生を化し。群心を感動し
給ふとを知る。今此に來到せよ。誰か復我を樂しまんと。
便ち制限を作さし。若佛よ食を與へ。佛語を聞く者あら
よ。五百の金錢を輸よさしめんと。制限を作して後。佛其國
に到り。阿難を將て。鉢と持して城に入り。乞食と給ふ。城

中の衆人。皆門を閉ちて應せず。佛空鉢よして出給ふ。此時に一家も。老たる使人あり。破れたる瓦器を持して。臭^{ニシ}潘^シ澱^シを盛り。門を出て之と棄つ。佛世尊の空鉢にして。來り給ふを見る。老使人。佛の相好金色。白毫肉髻。丈光なるか。鉢空しくして。食なきを見奉り。見已て思惟すらく。此の如くの神人。應に天厨を食すへし。今日自ら身を降して。鉢を持し乞を行し給へ。是れ大慈を以て。一切を愍み給ふ故からん。信心清淨にして。好供養せんと欲すれども。願の如くするに由なく。慚愧して佛に白さく。供を設けんと思ひ欲すれども。更に得ると能はず。今此弊食。佛

須ひ給へ。取給ふへしと。佛其心の信敬清淨なるを知り給ひ。手を神へ鉢を以て。其施食を受給ふ。佛時に即笑ひ給ふ。五色の光を出し。普く天地を照し。還て眉間相より入る。阿難合掌長跪して。佛に白さく。唯然あり世尊。今笑ひ給ふ因縁。願くは其意を聞かん。佛阿難よ告給へ。汝老女人信心にして。佛よ食を施すを見るや否や。阿難の言く見ると。佛言へく。是の老女人。佛よ食を施すか故に。十五劫の中。天上人間に福を受け。快樂よして惡道も墮せず。後男子の身を得て。出家學道して。辟支佛を成じ。無餘涅槃に入らんと。爾時に佛邊に。一の婆羅門あり。

立て偈を説て曰

汝是日種刹利姓

淨飯國王之太子

而以食故大妄語

如此臭食報何重

是時に佛廣長舌を出し。面上を覆て。髮際に至れり。婆羅門に語て言く。汝經書を見るに。頗る此の如くの舌ある人。而も妄語を作すや不や。婆羅門の言く。若人能く鼻を覆へ。言に虚妄なし。何に況や乃髮際に至るをや。我心に。佛必ず妄語し給はずと信せり。然れども少施の報の多きと。是の如くなるを解せずと。佛婆羅門に告給はく。汝頗る曾て。世に希有ある所の難見の事を見るや否や。

婆羅門の言く。我曾て婆羅門と共に。道中を行くに。一の尼拘盧陀樹を見るに。蔭買客の五百乗の車を覆へども。蔭猶盡きず。是れ所謂希有難見の事なり。佛の言く。此樹の種子。其形大小如何。答て言く。大さ芥子三分の一の如し。佛の言く。誰か當に汝か言を信すへき者あらん。樹大なると乃ち爾り。而も種子甚小し。婆羅門の言く。實は爾り世尊。我眼を以て之を見る。虚妄は非るなり。佛の言く。我も是の如し。老女人の淨信心の施。大果報を得るを見るも。亦此樹の如し。因少にして。報多あると。又是れ如來福田良美の致す所なり。婆羅門心開け意解し。五體を地

に投_ま過を悔て佛に向ふ。我心無狀。愚_よして佛を信せず。佛爲に種種說法し給ふに。初道果を得即時に手を擧て。大に聲を發して言く。一切衆人。甘露の門開けぬ。如何う出さるやと。城中の諸の婆羅門。皆五百の金錢を送て。王に與へて佛を迎へ。供養し奉る。皆言ふ甘露味を得たり。誰か當_よ此五百れ金錢を。惜むへけんやと。衆人皆去るを以て。制限法破れぬ。是の婆羅門の王も。亦臣民と共に。佛法を歸命し。城中の人。一切皆淨信を得たりと云己上智
度論 此譬を以て。一切世間出世間の。善惡の報へ。皆因小果多なると。尼拘盧陀樹の如くなるを。信知すへし。即

今開港都會_よ於て。百万の貨産を興す者あり。皆其原因甚微小なれども。其精神の貫く所。必ず多果を結し得たるなり。又破産の者へ。此に反して。少小の放逸散財より。能く多財を破産すると。准知すへし。汝諸の佛子等。此現事を以て。彼の微小の善惡。能く將來無量劫の間。極樂極苦の大果を感ずると。推して知るへきなり。若之を信せざる者へ。果して彼哲理を信せざる者なり。誰か哲理に合はずと云や

有人問て曰。戒法を受くれども。種種の妄念妄想を起さへ。還て破戒となるへき故に。今日の人へ。戒法を持つと

能はされぬ寧ろ受けざる方好しと主張する者あり。如何

答是は戒法の業非を制して煩惱を制せざることを知ら

ぬ故なり。業非といふ。身三口四に渉りて。事お顯れたる位

あり。煩惱といふ。心中に貪婬瞋恚等の妄念の起

る位あり。而れども能く道心を以て制抑すれり。持戒と

名つくるあり。又意の三業お付て。大小の異義あり。更にお

問へ諭へ悪馬を調ふるに轡を以て制御するか如し。煩

惱の悪馬をして。身口の悪業を作さしめり。則人をして。

率て三途に墮せしむ。若煩惱起るとも。悪業を作ささら

しめり。此戒の功德に依て。必ず天堂淨土に生ず。若戒を

受けざる者の善の其力弱きと。短航の梶をさか如し。故

に動もすれに覆没して。惡趣に墮して。象馬等の如き穢

福劣報を受くへきなり。故に十輪經に。簷蔔の華は。萎む

と雖ども。猶香しきと。餘の一切の華に勝る。破戒の比丘

は。猶諸の外道に勝ると云り。尼乾子經に。如來功德の

身は。戒を受るを以て本とし。戒を持つを以て始とすと

設ひ受已て犯すとも。受けざるへからず。受已て犯する

者へ。一旦惡趣に入ると雖ども。惡業盡き已て。後佛の出

世お生れて。必ず得脱するとあり。彼の蓮華色比丘尼へ。

過去迦葉佛の時。比丘尼となり。犯戒の罪に依て。地獄に

得たるは非すや。諸の佛子。深く此因果必定の道理を知て。一微善と雖とも。慢り怠る可からず。一少惡と雖とも。恐れ慎んで。作すと勿れ。

問。謹て慈誨を承んぬ。粗ホ受戒の功德を識知せり。然るに斯の如く。受戒の功德廣大なるといふ。本是れ戒法と持ちて。佛因を種ゑ。二利の善行あるを爲なり。而して今時世間を見るに。初より戒を護る。お心無く。但受戒の日は臨んで。纔に受戒の作法をのみ作す者あり。是れ還て慢法の罪有て。利益なきに似たり。故に世間の論者。之を誹議する者あり。されは但利益おきのみにあらず。却て他人

謗法の因縁を種る者に非すや。如何

答曰。然り。然りと雖とも。是は縦奪の二邊あり。奪門は約して云は。夫れ出家戒の如きは。人天の大導師として。永く來際を誓て。正法を護持し。一切衆生を利益するの基礎たれは。尤も至重至尊の。大事の因縁あり。故に初は四十條の遮難を問ひ。能く護持するに堪たる。大機を鑑みて。而して後。得度受戒せしむ。然るを初より。護戒の心無くして。佛法中に在て。利養を貪るか爲は。受戒法を行するか如きは。所謂盜法者として。又盜賊受用者なりと。呵し給へり。此の如き人。正法を玩弄視するか爲に。正法

の衰替。今日の如く甚しきに至れるあり。豈に恕すへけんや

復問佛法中ふ入り。比丘沙彌の籌チカを取り。佛法の利養を受て。護戒の心無きハ。盜賊住なりと云は、初より受戒せずして。而も佛法の利養を受け。猶受戒者を嘲ける者あるハ。如何

答上の受戒作法の人ハ比をれハ。一等の重罪なることを知るへし。但此二種の人の爲ハ。世人の輕侮するを招き。正法を破滅する罪ハ。同一般にして。獅蟲國賊の名稱ハ。共に遁れ難きなり。次に縱門に約して云ハ、薩婆多論

よ云。若淳重の心を以て受戒すれハ。教無教の二戒を成就す。憍慢の心を以て受くれハ。但其教のみ有て。其無教なしと云り。教戒無教戒とハ。亦ハ作戒無作戒とも云。新譯ハ。表戒無表戒と云り。表戒とハ。受戒の作法の時。戒師の足を攝し禮を作し。蹲踞合掌し。口に受戒の文を唱ふるを云ふ。無表戒とハ。若期限の間一日一夜。或ハ必す盡形壽等あり受る所の戒を護持して。犯さしと誓心決定する者ハ。無表色の戒體を成就して。期限の間。防非止惡の功能。三千界小乘又ハ法界大乘の有情非情の境ツキレに對して。成就する善法の體あるを云ふ。然るハ若誓心決定せず。憍慢の心を

以て受る者にハ。此無表色の戒體無しと雖とも。然れども其作法の間。合掌恭敬して。戒文を唱ふる善行あり。是を表戒と云なり。されハ始より護戒に意なく去て。受る者と雖とも。此表戒の功德ハ。之あるハ。況や又彼の醉婆羅門の如きハ。酒に醉亂して。出家を求むるに。猶將來解脱の因縁なりと説き給ふ。故ハ智度論に。曰。佛祇洹キヲハ在す。一の醉婆羅門あり。佛所ハ來至して。出家と作らんとを求む。佛諸の比丘ニハ救シして。爲ハ剃頭シ。袈裟を著せしむ。酒既ハ醒て。己身變異して。忽比丘となれるを見て。驚怪して。即便ち走り去る。諸の比丘。佛ハ問ハ奉る。何を。

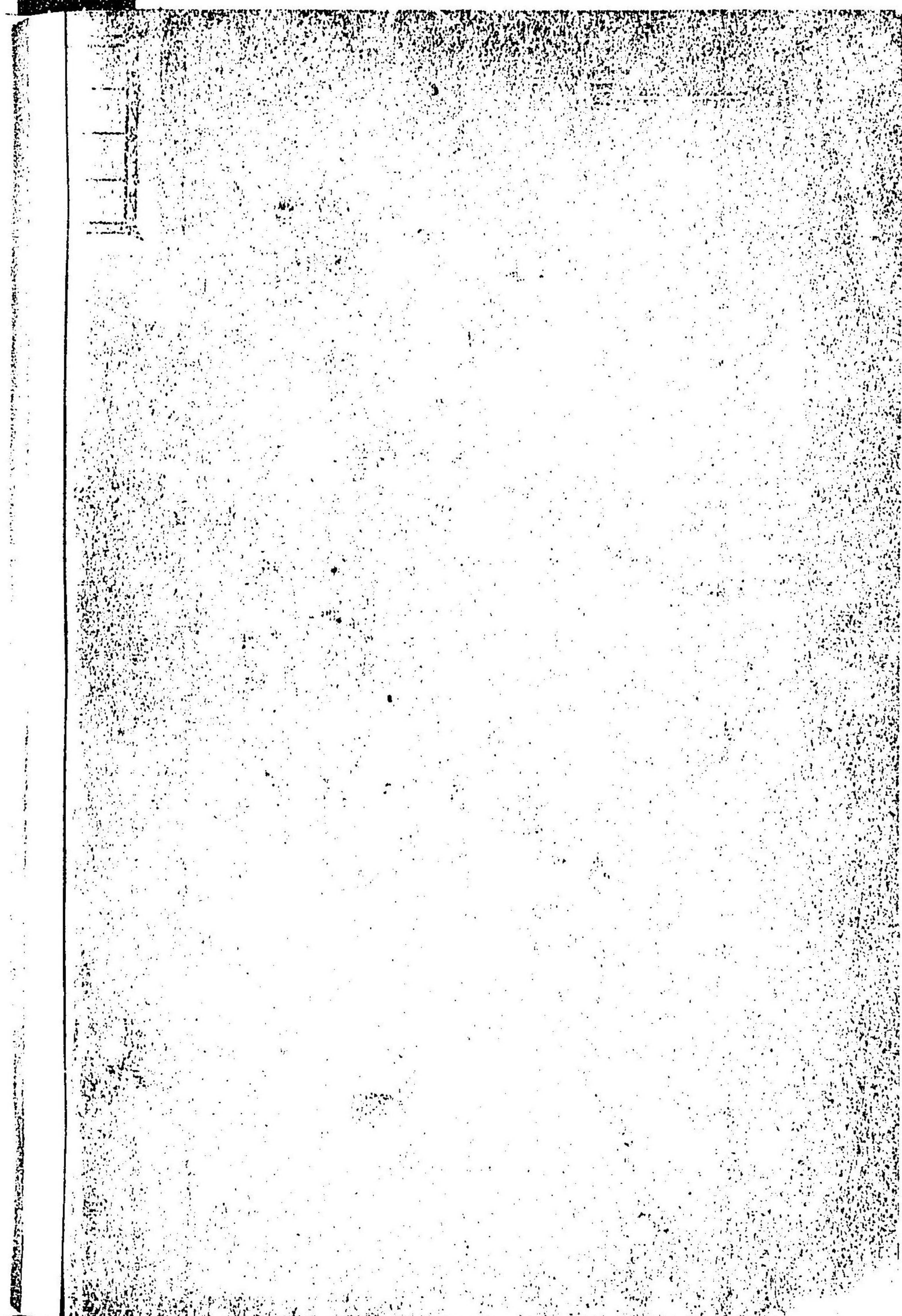
以てか。此婆羅門ハ比丘となるを。聽ヒ給ひしや。佛の言ク。此婆羅門無量劫の中。初より出家の心なし。今醉に因て暫く。微心を發す。此因縁を以て。の故ハ。後當ハ出家得道すへしと。是の如くの因縁。出家の利。功德無量なり。是を以て白衣ハ五戒ありと雖とも。出家に如かすと云り。世尊既ハ醉婆羅門に。出家受戒を聽ヒ。得道最初の下種とせしめ給ふ。明ハ知ぬ。昔より今に。出家の功德無からん衆生。永く佛果菩提の。得ハからんと云とを。此婆羅門醉亂の故に。暫く微心を發して。剃頭受戒シ。比丘となれり。酒の醉醒さる間。幾くハ非されども。此功德を保護

して得道の善根を増長せしめし旨。是れ世尊誠諦の金言なり。如來出世の本懐なり。一切衆生。明にレ己レ今當の中ニ信受奉行し奉るへし。誠に其發心得道。定めて刹レ耶よりする者なり。此婆羅門。暫くの出家の功德。猶是の如し。何レ况んや人間一生の間。出家受戒せん功德。更ニ醉婆羅門よりも劣らんやと正法眼藏。出家功德の説あり。己上へ。出家の受戒ニ付て論ずる者あり。若在家の受戒の如きへ。其攝取の境。是よりも猶寛廣なりとす。梵網經に曰。佛子。諦ニ聽レ。若佛戒を受る者へ。國王王子。百官宰相。比丘比丘尼。十八梵ニ。六欲天子。庶民黃門。姪男姪女。奴婢ニ。八部鬼神。金剛神。

畜生乃至變化人迄も。但法師の語を解せし。盡く戒を受得すへし。皆第一清淨の者と名くと云り。此中黃門姪男姪女等へ。出家の器ニ非ず。况や畜生乃至化人。皆出家の戒を受るとを許し給はず。然るニ今菩薩戒へ。法師の語を解する者ニへ。盡く受戒するとを許し給ふ。此中野干の類。龍鬼の類へ。其智慧人ニ優れる者ありと雖とも。其果報拙劣なるを以て。殺生等の重禁を。堅く守ること能はず。然りと雖とも。十戒の中ニ一戒をも持ち。一戒の中ニ一分をも持つとある者へ。皆第一清淨者と稱讚し給へり。此中若一戒をも持つと能ハざる者へ。現ニ其効なし

と雖ども必ず未來得脱の因縁となるとい。彼醉婆羅門
 の例して知るへし。已上縱奪の二門深く憶念して。如來
 大悲等流の波羅提木ハレラジキ又モ戒ノ梵ヲを尊信し。隨順恭敬をへ
 し。故に設ひ護持する能はさるも。尊信恭敬の功德猶諸
 の外道の持戒苦行に勝ると。比類すへからず
 上來の所論の。上の問を決せんか爲ふ。經論を引て。結縁
 の功德猶廣大なるを示す者なり。然るに今日諸佛子
 に對して。此大乘菩薩の十善戒を授與するとい。豈に唯
 遠く。未來解脱の結縁と。するのみ止まらんや。諸佛子。
 受け難き人身を受け。遇ひ難き此無上の正法に遇ふ。此

時解脱の正因を成就せすん。亦何れの時をか。期すへ
 けん。彼野于七日間。十善を憶念して。都率天へ往生する
 とを得たり。然るを况や諸佛子。盡形壽乃至未來際を誓
 て。此菩薩の十善戒を受得し。護持する功德。豈に野于よ
 りも。劣なるへけんや。深思觀察して。各自ら勤め勵ま
 て。怠ると勿れ。怠らされは。必ず解脱を得へし。怠るは是
 れ。自心慢法罪の致す所にして。受戒作法の咎に非ず。深
 く此善因善果。惡因惡果。各種の原因。能く各種の結果を
 成ずるとを照察し。横計して。邪心を以て。善惡各種の因
 果を混同して。撥無斷善根の闡提心を發すと勿れ



寺 4 6

537

受十善戒作法諺詮

国立国会図書館

016281-000-6

特46-537

受十善戒作法諺詮

雲照/著

M21.4

ABD-0162

